『ちくま評論選』解説

30　「友情の点呼に答える声」　市村弘正

■凡例
1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。
2　▽は、本文の追跡・分析。
3　▼は、読解に関する技法。
4　☆は、記述に関する技法。

■見通しと追跡

①　●ひどく色褪せてしまった一つの言葉、私たちのもとでほとんど死語と化しつつある言葉が、指さす関係と感情のあり方について考えたい。「友情」という観念についてである。私たちは気恥ずかしさなしに、この言葉を使うことができなくなっている。それはたちまち白けた気分を生みだしたり、道化た響きを誘いだしてしまう。この◆1言葉の瀕死状態は、私たちの時代と社会を貫くどのような事態を映しだしているのか。

▽明確に**問い**が設定される。現在、「友情」という言葉が指し示す関係と感情とはどのようなものか。ただし、「友情」という言葉は、今や、気恥ずかしさ、白けた気分、道化た響きを生んでしまう。それは、私たちの時代と社会のありさまを反映していると考えられる。その、私たちの時代と社会のありさまとは？

実感としてはどうだろうか。ともだちと、「おれたちの友情はこれからも変われへんよな」と、素(す)でいいあえるだろうか。どこか、ギャグ、みたいになってしまわないだろうか。ドラマの中のことばのような感じになってしまうのはなぜだろうか。なぜ、正面切って、「友情って大切やん」と、いえなくなっているのだろうか。

◆問1「言葉の瀕死状態」とはどのようなものか。

この問いは案外むずかしい。原則通り☆傍線部延長して、「この言葉の瀕死状態」とすれば**☆指示内容の問題**だ。さて、そこからが一手間かかる。**☆指示内容＝直前＋抜き出しの原則**でいけば、「私たちは気恥ずかしさなしに、この言葉を使うことができなくなっている。それはたちまち白けた気分を生みだしたり、道化た響きを誘いだしてしまう」をまとめればいいことになる。傍線部を明示化して、一つの文にすれば、「私たちが気恥ずかしさを感じながら、友情という言葉を使うと、たちまち白けた気分が生まれたり、道化た響きが誘いだされてしまう」となるだろう。

この具体的なありさまと、「瀕死」という**☆比喩**はどのように重なり合っているのか。言葉が死にかけている、といっても、意味がわからなくなって、だれも使わなくなっているという、いわゆる「死語」になっているということではない。友情という言葉の「意味はわかる」。しかし、実際には「口に出して使えない」。これを「瀕死状態」といっていると考えられる。生きてはいる（意味はわかる）けれど、ほとんど死んでいる（実際には使われない）のである。

〔解答例〕「言葉の意味自体は理解できるが、実際には使用できない状態になっていること。」

※具体的に「実際に使うと白けた気分が生まれたり、道化た響きが誘いだされてしまう」という内容を入れてもいい。

②　●そういう社会に生きている私たちにとって、たとえば次のような詩句はどのように受けとられるのだろうか。

嵐はやんだ……生き残りは僅かだ……
友情の点呼に答える声の寂しさよ……
誰を呼ぼうか……誰に話そうか……
生き残った私のこの悲しい喜びを……

▽「そういう社会」とは、「友情」という言葉が、まともな意味としてつかえなくなっている社会。

私だけが生き残った。友だちはみんな死んでしまった。私は生き残った喜びと孤独に陥った悲しみを、だれかとわかちあいたい。しかし、だれもいない…。

③　●一九二五年に自殺したロシアの詩人エセーニンのこの詩句を、『ガン病棟』の作者は、強制収容所の生き残りの男に口ずさませている。すべてを奪い去られた男から発せられたこの言葉は、そこでは「生命」を意味する名前をもつ女性によって受けとめられていた。私たちの生が「悲しい喜び」に染めあげられるほかないかのように。

▽『ガン病棟』の作者とは、アレクサンドル・**ソルジェニツィン**。ロシアの作家。一九一八年生まれ。二〇〇八年八月没。一九四五年、砲兵中隊長として東プロイセンで転戦中、思想的理由から逮捕され、八年間の強制収容所生活を送った。その後も流刑者としてカザフにあったが、五六年の第二〇回党大会後に名誉を回復される。六二年一一月、収容所体験に題材をとった中編『イワン・デニソビチの一日』で一躍世界的な注目を浴びた。フルシチョフの失脚後、作者への風当りが強まり、本国ではほとんど作品発表の道を閉ざされた。人間の生と死の普遍的問題を五〇年代なかばのソ連の状況のなかでとらえ、社会の病疾をえぐった長編『ガン病棟』（一九六八）、囚人のみからなる科学研究所を舞台にした『煉獄(れんごく)のなかで（第一圏にて）』（一九六九）などの作品で、トルストイ、ドストエフスキーの伝統を継ぐ大作家との評価が国際的にも定まり、七〇年度ノーベル文学賞を受賞。一九七一年にはロシア革命の歴史的再検討を目ざした大河小説の第一部『一九一四年八月』を海外で発表したが、七三年からソ連当局の政治的非難が強まり、体制への根源的批判の書『収容所群島』の刊行を機に、七四年二月国外へ追放、以後はチューリヒを経てアメリカに定住。

④　●収容所世界と友情。この取りあわせは、私たちのしなびた想像力では手に負えないかもしれない。しかし、すべてを剥ぎとられることによってそこに「核心」のみが露になるという、その◆2逆説的な事態から目をそらすわけにはいかないだろう。最小限の食物が一個の身体を支えるとき、丹念に噛みしめられる二百グラムのパンは、深く痛切な祈りがこめられた物となる。二百グラムの重さのまま、それをはるかに越えたいわば根底的な重さを獲得する。それと同様に、そこでなされる「友情の点呼」は、ただの親密な呼びかけではない。

▽そこでなされる「友情の点呼」＝収容所世界でなされる友への呼びかけ。

◆問2「逆説的な事態」とは何をさすか。

おなじみ、逆説的、の説明。一見、～なのに、じつは、～であるということ。「収容所世界と友情」という取りあわせは、一見矛盾している。「収容所」は、人間的な結びつきがすべて奪われる非人間的な場所。「友情」はもちろん、人間同士のあたたかい結びつきをいうのだから。☆傍線部延長して「その逆説的な事態」の☆指示内容をとらえる。直前→「すべてを剥ぎとられることによってそこに「核心」のみが露になるという」事態。この内容をわかりやすくいいかえる。

〔解答例〕「収容所は、人間的な結びつきがすべて奪われる非人間的な場所であるが、すべてを剥ぎとられることによって、逆に、そこに人間的な結びつきの最も大事な部分が明らかになるということ。」

⑤ ●人間をとりまく世界を、私たちに生きられる世界たらしめるための、それは根本的な呼びかけとなる。互いに呼びあい答えあうところにのみ、人間的世界が立ち現れるとすれば、すべてを奪いとられた「生き残り」の点呼は、まさにそのことによって、深く痛切な連帯をもたらす声を獲得するのである。◆3社会を呼び寄せる声である。そこでは友情は、ふやけた気恥ずかしいものであるどころか、ぎりぎりのところで掴みとられた社会関係の取っ手のごときものであった。点呼の声は社会破壊的な世界において、社会を再構築しようとする意思そのものとなる。

▽硬い言葉遣いだが、同じことをいいかえて伝えようとしているので、落ち着いて整理しよう。

・「収容所世界（社会破壊的な世界）でなされる友への呼びかけ」＝「私たちに生きられる世界（人間的世界）にするための呼びかけ」

・「互いに呼びあい答えあう」→「人間的世界が立ち現れる」

・「すべてを奪いとられた「生き残り」の点呼（だれかいないか！）」→「深く痛切な連帯をもたらす声（社会（仲間・友情）を呼び寄せる声＝社会関係（つながり）の取っ手）を獲得」→「人間的世界（生きられる世界、再構築された社会）が立ち現れる」

◆問3「社会を呼び寄せる声」とはどのようなことか。

社会のいいかえを確認。人間的世界、生きられる世界、再構築された社会。声の説明を確認。互いに呼びあい答えあう声、深く痛切な連帯をもたらす声。

〔解答例〕「人間的世界を再び作り出すために、互いに呼びあい答えあう声。」

⑥ ●エセーニンの死の前年（一九二四）、イギリスの作家フォースターはその小説のなかで、イギリス人とインド人、すなわち植民地支配によって引き裂かれた人間たちのあいだに友情は可能かどうかを問いつめていた。その困難を書きしるしていた。

▽■エセーニン＝一八九五―一九二五。ロシアの叙情詩人。中部ロシア、リャザニ県の農民の子に生まれる。処女詩集『招魂祭』（一九一五）で首都の詩壇にデビュー。処女詩集で、貧しい農村ロシアへの愛、漂泊、ソバの花や、牧歌的自然の遠景に置かれたロシアの心優しいキリストを賛歌した彼は、一七年、十月革命を歓喜して迎えると同時に、農民社会主義の理念に燃える「スキタイ人」グループの積極的一員として活躍。二一～二三年、愛人イサドラ・ダンカンとヨーロッパ・アメリカ旅行に出るが、文明に絶望、また現実の革命ロシアの未来像にも幻滅し、農民反乱の王国へ回帰し、『酔いどれモスクワ』や詩劇『ろくでなしの国』を書くことで精神上の危機を乗り越えようとする。トルストイの孫娘ソフィヤと結婚、生涯の暗部を回想した長詩『不吉の人』（一九二五）でデカダンな生活から再生しようとしたが、そのやさきの二五年一二月二八日、投宿中のサンクト・ペテルブルグのホテルで、血で詩「さようなら友よ」を書き残して縊死した。

■フォースター＝一八七九―一九七〇。イギリスの小説家、評論家。一月一日、ロンドンの福音派の一派で富裕なクラパム派の名家につながる建築家の子として生まれた。ケンブリッジ大学に学んだが、のちに「ブルームズベリー・グループ」を形成する人々と交わり、因習化して自由を拘束するばかりのキリスト教を棄て、人間の多面的才能を養うことを理想とする異教的なギリシア文化にひかれた。代表作『インドへの道』（一九二四）では、インドでの生活体験をもとに、異文化間の相互理解のむずかしさを描いた。彼の作品には、現世での人間相互の理解の困難に絶望しながらも、神秘的経験に媒介される理解の可能性が暗示されている。

⑦ ●帝国主義と友情。二十世紀のもう一つの主題をかたちづくるこの組みあわせは、大日本帝国の後裔にとってむろん無縁ではありえない。それどころか、いまもそれについて根本的な反省を迫られる事態を抱えたままである。植民地主義という外傷は、私たちの社会的のみならず精神的な内容をも貫くからである。それは同様に、帝国主義の遺産を受けついだ社会主義国にとっても深刻な課題であった。領土や国境や国家形態の相続は、その政治的思想や行動様式を汚染せずにおかないのである。

▽何をさしているのか、知識的な前提が必要。⑥にあった「帝国主義と友情」という主題とは、「植民地支配によって引き裂かれた人間たちのあいだに友情は可能か」という問いのことである。在日韓国朝鮮人と日本人のあいだに友情は可能か、というのもその問いの一つである。

⑧● 「たとい五千五百年かかっても、われわれはあなたたちを追い出してみせる。……そうしたら、あなたとわたしは友人になれるだろう。」という小説のなかのインド人の言葉は、いまも世界の各地にかたちを変えて反響している。それぞれの「独立」をめぐって民族間が衝突を繰りかえし、独裁体制を倒して「自由」になったはずの地域で少数民族に対する迫害が頻発し、同じく「民主化」しつつある社会で「自分たちの国は自分たちのもの」といった意味のスローガンのもとに他民族の住民を追放しようとする。独立も自由も民主化も、二十世紀の精神的な地形のもとでは、異質な人々と「友人になれる」ことを保証するものとはならないのである。ここでも友情は、◆4民族国家という隔壁のもとで、その働きをぎりぎりのところで試されている。

▽「日本は日本人のためのものだ。外国人は出て行け」という言葉は、インターネットの世界の中にあふれかえっている。それぞれの「国」や「民族」が、互いに異質な「国民」や「民族」を排斥し合っている。

◆問4「民族国家という隔壁」とはどのようなものか。

形式的な目の付け所は、（☆傍線部延長して）「民族国家という隔壁のもとで」の「も

とで」。「自分たちの国は自分たちのもの」といった意味のスローガンのもとに」に目がいくだろう。「民族国家という、人と人を隔てる壁」とは、「自分たちの国は自分たちのものという考えに基づいて、人と人を隔てようとすること」を指している。

いわゆる民族自決ということだが、それが現実的には悲劇を生んでいる。

〔解答例〕「一つの国は一つの民族のものという考えに基づいて、他民族の住民を追放しようとする考え。」

⑨ ●友情についてのフォースター自身の態度は、シンプルだが力強いものだった。第二次大戦直前に執筆された有名なエッセイのなかで、かれは言いきっている。

もし私が国を裏切るか友人を裏切るか、どちらかを選ばなければならないとしたら、国を裏切る勇気をもちたいと思う。

⑩ ●この応答は個人主義にすぎないとか、このような「人格的関係」に立脚する態度では現実の事態に対処できない、といった批判があるだろう。あるいは、個人主義と表裏一体のコスモポリタニズムにすぎない、と訳知り顔に解説されてしまうかもしれない。しかし、私たちの周囲にこれほど◆5力強い個人主義をみることは稀なのである。

▽問5は、⑪を読んでから。コスモポリタニズム＝世界主義。個人と世界が直接結びつく。

⑪ ●友人に対する愛情と誠実は、しばしば国家の要求や指令と背反し対立する。ここにあるのは、「国家を倒せ、と私は言うが、それは国家が私を倒すだろうことを意味する」ことを覚悟した、個人主義であり「友情」思想なのである。この思想態度はもっと先へ行けるだろう。たとえば貨幣に還元される体制に対して、神とかプロレタリアートとかに還元される体制は、真に対立的でありうるだろうか。そうでありうるためには、何ものにも還元されず回収されない、また◆6関係性以外に立脚しない、その意味でアナーキーな思想の核を必要とするのではないか。徹底した友情の観念はその可能性を含んでいるように思う。

◆問5「力強い個人主義」とは、どの点でそうであるのか。

「国を裏切るか友人を裏切るか、どちらを選ぶかという問いに対し、国を裏切る方を選ぶ」点を「力強い個人主義」といっている。国を選ぶ決意とは何を意味するのか。「それは国家が私を倒すだろうことを意味することを覚悟した個人主義である」。国家の要求や命令に反抗したために、国家に殺されることを覚悟しているのである。

〔解答例〕「（友情を貫くために）国家の要求や命令に反抗することになり、国家に殺されることになってもよいと覚悟している点。」

◆問6「関係性以外に立脚しない」とはどのようなことか。

ここは筆者のことばが少し足りない部分だと思う。わかってもらおうとする気持ちに欠けているかも…。

「貨幣に還元される体制」とは、自由主義経済・資本主義経済に支配されている世界のこと。なんでもお金、お金には勝てない世界。お金が一番強い価値であって、だもがそれを拠り所としている世界のことだ。つまり、今の私たちの世界。「プロレタリアートに還元される体制」とは、資本主義世界とは違って、資本家に対立するプロレタリアート（労働者階級）に価値を置く世界。社会主義体制が目指した世界。「神に還元される体制」は、キリスト教会とかイスラムとか、宗教的価値が絶対の世界。

筆者は、「真に対立的でありうるだろうか」と疑問形で止めているが、ここの真意は、対立的ではあり得ない、という反語形である。「貨幣・社会主義のイデオロギー・宗教といった絶対的な価値を拠り所とする思想は、どれもだめだ」といいたいのである。「そうでありうるためには」＝「絶対的な価値を拠り所とする思想と真に対立的であるためには」「何ものにも還元されず回収されない、関係性以外に立脚しない、その意味でアナーキーな思想の核が必要だ」という文意である。アナーキーというのは、あらゆる権力を拒否し、絶対的な自由を求める思想、という意味。

ここでようやく、筆者のいいたいのは、「絶対的な価値を拠り所としない、関係性以外を拠り所としない思想」ということが見えてくるだろう。

〔解答例〕「（神や貨幣やイデオロギーといった）絶対的な価値を拠り所とせず、個人どうしの愛情と誠実に基づく関係だけを拠り所とすること。」

⑫ ●そしてまた、国家と友人との選択に関してフォースターが古代ローマを引きあいに出したように、この友情の思想は、長い時間をかけて育まれてきたものであった。つまり本来◆7長持ちのする思想であった。古代の「友情の政治学」においては、異質な人々のあいだに対等性にもとづく意見と信頼の空間を共有させる友情の働きは、自治的社会を形成するものと考えられた。以来それは、いつでもどこでも個人を他者と結びつけ、政治、経済、宗教、その他の活動を含む関係に関与させて、社会的存在とする動力であった。言いかえれば、それぞれの社会はそれぞれの仕方で、諸個人のあいだに友人関係を形成し定着させるための慣習と制度を備え、そのための「感情教育」を用意していた。◆8それなしには社会が社会たりえない基礎的感情だったからである。

▽「友情」の機能、はたらきが説明されている。友情は、「異質な人々のあいだに対等性にもとづく意見と信頼の空間を共有させる」。身近な例でいえば、よい「クラス」はそうだろう。また、友情は「個人を（他者と結びつけ、社会的関係に関与させることによって）社会的存在にする」。友情なしには社会は成り立たないのである。

◆問7「長持ちのする思想」とはどのようなことか。

何を答えてほしいのか、ちょっとわかりにくいところもあるが、端的にいうなら、「友情の思想は、長い時間をかけて育まれてきた」思想だということ、ということになる。「長い時間」の内容をかんたんに補足しておくべきだろう。

〔解答例〕「友情の思想は、古代以来、異質な人々を結びつけ、個人を社会的存在にする思想だったということ。」

◆問8「それ」とは何をさすか。

もちろん、「友情の思想」だが、あとに続く部分を補っておきたい。友情とは、社会を構成するための基礎的感情だった、という内容である。

〔解答例〕「社会を構成するための基礎的感情である友情の思想。」

⑬ ●その観念は少なくとも、十八世紀末の文学者の「友情こそが社会の最も聖なる絆である。」という主張をへて、今世紀初頭の哲学者による「友情なしには、世界には社会というものは全く存在しない。」（アラン）という定義にまで及んでいる。この概念の身上書には、様々の社会形態におけるその重要性が書きこまれているのである。そうであるとすれば、友情という言葉から意味を叩き出してしまい、ほとんど死語化させている「社会」とはどのようなものなのか。

▽最初の問いに戻る。社会を構成する要である友情がない「社会」とは？

⑭ ●この「戦争と革命の世紀」は、強制収容所と難民を生みだし、相互の不信と憎悪を生みだしつづけてきた。それは、この非情の世界に生きる人々を隅々まで貫いて、友情の空間など跡形もなく破壊してしまうほどであった。あるいは、そのことによって友情をますます◆9私的な温もりのなかに封じこめてしまうことになった。

▽この「戦争と革命の世紀」とは、二〇世紀。二度の世界大戦。民族紛争。全体主義体制による強制収容所。前回の岡真理の文章、いつかの石原吉郎のシベリア収容所の話なども思い起こしてもらいたい。

ここでいったん、筆者は、悲観的なことを書く。

◆問9「私的な温もり」とはどういうことか。

☆対比的に書くべき。〈友情＝社会的〉の対として〈友情＝私的〉と述べられている。

〔解答例〕「社会を構成する感情としての友情ではなく、個人的な関係にとどまる感情としての友情。」

⑮ ●しかし、対抗社会へ呼びかける友情の点呼がかき消されたわけではない。その声を聞きわける聴力が失われたわけではない。そうであるならば、エセーニンやフォースターたちによって告知された、いわば二十世紀の時代経験としての友情は、どのようなかたちで成立し、どのような場所を支えるものとしてあったのか。少なくとも、それを見届けておかなければならないだろう。それが担いえた意義とそれが被った制約とは、私たちが生きる社会の内実を指し示しているはずである。

▽悲劇の後に、なお呼びかけようとする友情の声、これを「二十世紀の時代経験としての友情」といっている。友情は、なお、生き続けている。それには、ある意義があったはず。筆者はそう考えている。

⑯ ●たとえば一九三六年のスペインにおける、バルセロナ出身の少年兵士とイギリスから来た伍長のあいだの奇妙な交流。イギリス人の持ち物を盗んだ嫌疑をかけられ屈辱をうけた少年が、分隊で悶着を起こして孤立したその伍長を一転して庇いつづける。ほとんど信じがたくみえる「好意の蘇生」であった。以後二人のあいだに交流が深められていく。――いかにも小さな事件である。とるにたりないと言っていい出来事である。しかし、戦闘の合間のこの小さな出来事を、イギリス人伍長ジョージ・オーウェルは大切な記憶として持ちつづけた（『スペイン戦争回顧』）。

▽■オーウェル＝一九〇三―五〇年。イギリスの小説家、批評家。税関吏の息子としてインドに生まれ、八歳で帰国。授業料減額で寄宿学校に入り、奨学金でイートン校を卒業したが、大学に進まずにただちにビルマの警察官となり、植民地の実態を経験。一九三六年からスペイン内戦に共和側として参加したが負傷。『カタロニア讃歌』（一九三八）はここで行われた激しい内部闘争の実態の報告、糾弾の書である。第二次世界大戦中はＢＢＣで極東宣伝放送を担当。戦争中ソ連のスターリン体制を鋭く戯画化した動物寓話『動物農場』を執筆、戦争直後の四五年に出版、一躍ベストセラー作家となった。四九年、言語、思考までを含めた人間のすべての生活が全体主義に支配された世界を描いた未来小説『一九八四年』（一九四九）を完成した。この最後の二作は現代社会の全体主義的傾向を批判、風刺した文学として重要。

⑰ ●それは、二人が「感情の幅を拡げる経験」を共にしていたからこそ可能だったと考えるからであり、それこそがかれにとって◆10「革命」であったからである。つまり、そのささやかな「好意」の交換は、あらゆる「基本的な感情」に背をむけ、その幅を切りつめてしまう現代社会に真っ向から対立するものであった。〔読2〕友情はこうして二十世紀の文明世界を相手どることになる。その趨勢に対決する関係を支えるものとなる。しかし逆に言えば、このような小さな場所を大切にしなければならないほど、この世界は苛酷さに覆われているということでもあった。

◆問10「革命」とは。この場合どのようなことか。

「革命」の辞書的な意味は、「被支配階級が支配階級を暴力的に打倒し、政治権力を握り、社会を変革すること」であるが、ここでは、意味を広げて「支配的なものに対する抵抗」というほどの意味にとっておこう。「つまり」に注目して「そのささやかな「好意」の交換は、〔あらゆる「基本的な感情」に背をむけ、その幅を切りつめてしまう〕現代社会に真っ向から対立するものであった」を材料にして解答を作る。

〔解答例〕「少年とのささやかな好意の交換は、人を結びつける基本的な感情である友情に背をむけ、その幅を狭めている現代社会に抵抗するものであったということ。」

⑱ ●たとえばまた、一九六八年のベトナムにおける或るアメリカ人とベトナム人、すなわち敵対国の人間のあいだのぎくしゃくした交流。そこに興味深いことに、オーウェルと同様に「感情の幅」をめぐる議論が登場する。ハノイを訪れた一人のアメリカ人は、ベトナムという国の相貌が容易につかめず、思いこみとは違って知的にも感性的にもつながりをつくりだせないことに困惑する。それは何よりも「ベトナム人のあいだに感情の幅広い領域がないこと」によるものと思われた。◆11この隔たりと不信と苛立ちの感情をときほぐしたのは、そのアメリカ人を受けとめるベトナムの人々

の態度そのものであった。

◆問11「この隔たり」とはどのようなものか。
☆指示内容→直前＋抜き出し。
〔解答例〕「知的にも感性的にもつながりをつくりだせないこと。」

⑲ ●「このような歴史の瞬間に、ベトナムの人びとがアメリカ人を盟友として迎える所以はどこにあるのか、私は具体的に想像しはじめた。」（ソンタグ『ハノイへの旅』）ここで「盟友」であることは、ただちに革命的でもなければ世界を相手どることでもない。わずかに不信を解きほぐし、その隔たりについて想像力を促すだけである。それはささやかな働きかもしれない。しかし憎悪の充満したこの世界のなかで、敵対者のあいだにつながりを生みだし、それを「具体的な想像」によって堅固なものとするのは、束の間であろうと友情によって支えられた関係においてであった。それを外にしてはなかった。そのとき世界は、敵意と残酷に塗りこめられない場所をもつことができたのである。

▽敵対国であるアメリカ人を、ベトナムの人々は、なぜ、友として迎えたのか。「わずかに不信を解きほぐし、その隔たりについて想像力を促すだけ」「束の間であろうと友情によって支えられた」。

■スーザン・ソンタグ＝一九三三――二〇〇四年。アメリカの作家、批評家。

⑳ ●この二つの場面において、かれらはそれぞれの仕方で、たんに心を許しあう親密さにとどまらない友情について語っている。私たちが深く呼吸をし互いに生きていく世界を支える条件として、友情にもとづく関係が捉えられている。そのことは、スペインの「革命」やベトナムの「社会主義」に相対したとき、かれらが教条や出来合いの概念によってでなく、それを支える「感情」の次元に立ちもどって考えたことを示している。そこでは教義とその解釈に、事柄についての独占権は認められていないのである。こうして、普段の生活のなかで切り縮められた感情の幅を拡げるものでなければ「革命」に値しないであろうし、多様なものを受容する幅ひろい感情領域がなければ「社会主義」は窮屈なものと考えられるだろう。

▽筆者の主張が現れる。社会を支えるのは、友情である。教条や出来合いの概念ではない。実際の「社会」を考えるとき、このことは、実感として伝わってくる。

21 ●「感情の幅」の広狭とはいかにも曖昧な範疇である。理念や教義の厳格な受容者には耐えがたいかもしれない。しかし、いうまでもなく人間にとって耐えがたいのは、精緻な教義が現実化していないことではなく、かつてプラハの二千語宣言が「市民のあいだで信頼ができなくなった。正直が通らなくなった。」と声をあげたように、基本的感情が成り立たないような場所に生きることなのである。そうだとすれば、体制の理念が精錬され、教義が整備されていく過程で、いわば不純で曖昧な混ざり物として叩き出された感情的要素を、できるかぎり呼びもどし集めなおさなければなるまい。この曖昧な混ざり物が息づく場所、信頼や正直が意味をもつ場所、それを何と呼べばいいか。〔読3〕「社会」と呼ぶほかないだろう。そして、このような社会に支えられないかぎり、「社会」主義もまた機能不全に陥るほかない。友情という無力にみえる小さな絆は、まっすぐに◆12この場所を指さしているのである。

▽主張の明確化。「感情的要素を、できるかぎり呼びもどし集めなおさなければならない」、そして、「信頼や正直が意味をもつ場所」、すなわち、「友情」という言葉をまともに使える場所を取り戻そう、ということだ。

孔子の言葉が思い浮かぶ。あるとき弟子の子貢が孔子に尋ねた。政治で大切なことは？　孔子はいう。食糧、軍備、信頼の三つを満たすことだ。子貢は、やむをえず、どれかをあきらめるとしたら？と聞いた。軍だな。では、残りの二つではどちらを捨てますか？　孔子は、食だ、と答えた。

「民無信不立、民は信なくんば立たず、**人間というものは、信頼や正直という基本的感情が成り立たないような場所に生きることはできないのだよ**」。

◆問12「この場所」とは何をさすか。
「場所」で探せばいい。
〔解答例〕「信頼や正直が意味をもつ場所。」

■**読解問題1**「友情」と「収容所」「帝国主義」との関係から、二十世紀はどのような時代か説明しなさい。目安一八〇字。

読解問題は、文章全体を、さまざまな角度から問い直している。

まず、おおざっぱに要点をとらえよう。「友情」はよいもの、「収容所」「帝国主義」はそれを壊してしまう悪いものだった。二十世紀は、「収容所」「帝国主義」がはびこった世紀だった。

これだけでいいか？　いや、後半には、同じ二十世紀に「友情」が生き続けていた例が挙げられていた。

まとめると、二十世紀は、友情が無力化した時代であると同時に、それゆえに、友情の意味を捉え直す時代でもある、ということになる。わるいこととよいこと。この組み立てでいく。これまで検討してきたところから、語句を借りてこよう。

1収容所とは、すべての人間的な結びつきを奪う非人間的な場所である。（問2）
2帝国主義は、形を変え、他民族の追放といった形で人間のつながりを破壊している。（⑧）
3収容所と帝国主義は、友情を破壊した。
「この「戦争と革命の世紀」は、強制収容所と難民を生みだし、相互の不信と憎悪を生みだしつづけてきた。それは、この非情の世界に生きる人々を隅々まで貫いて、友情の空間など跡形もなく破壊してしまうほどであった。」（⑭）
4一方、収容所の中で、人間的な結びつきの最も大事な部分が明らかになるという例、（問2）
5国と国の争いを超えた人間的な結びつきの可能性を示す例（⑯⑱）もある。

6「しかし、対抗社会へ呼びかける友情の点呼がかき消されたわけではなく、二十世紀の時代経験としての友情は、ある意義をもっていた。」(⑮)

〔解答例〕「二十世紀は、強制収容所と難民を生みだし、相互の不信と憎悪を生みだしつづけてきた。それは、人々を隅々まで貫き、友情が生きる空間を跡形もなく破壊してしまうほどであった。しかし、一方、収容所の中で、人間的な結びつきの最も大事な部分が明らかになるという例や国と国の争いを超えた人間的な結びつきの可能性を示す例もあり、二十世紀は、友情の意味を捉え直す時代でもあった。」(一七八字)

■**読解問題2**「友情」が「二十世紀の文明世界を相手どることになる」のはなぜか、説明しなさい。目安一二〇字。

☆なぜ～どのように型。「友情」はどのように「二十世紀の文明世界を相手どることになる」のか。**☆傍線部を延長**すれば、友情は「その趨勢に対決する」とある。「その趨勢」とは何か。直前にあった、「現代社会があらゆる「基本的な感情」に背をむけ、その幅を切りつめてしまう」趨勢、である。友情とは、その逆の、「感情の幅を拡げる経験」である。⑳には、「多様なものを受容する幅ひろい感情領域」という言葉もある。

☆切り身にして、いいかえていく。「友情は／このように／二十世紀の文明世界を／相手どる」から。「相手どる」は、「対決する」を借りてもいい。

〔解答例〕「友情は、多様なものを受容する幅ひろい感情に支えられている。一方、二十世紀の文明世界は、人間をつなぐ基本的な感情の幅を切り詰め、社会から信頼を奪ってきた。その中でささやかな友情を具体化していく行為は、現代社会のあり方を問い直すことになるから。」(一二〇字)

■**読解問題3**「「社会」と呼ぶほかないだろう」というときの「社会」とはどのようなものか、まとめなさい。目安九〇字。

「不純で曖昧な混ざり物として叩き出された感情的要素を、できるかぎり呼びもどし集めなおさなければなるまい。この曖昧な混ざり物が息づく場所、信頼や正直が意味をもつ場所、それを何と呼べばいいか。「社会」と呼ぶほかないだろう。」

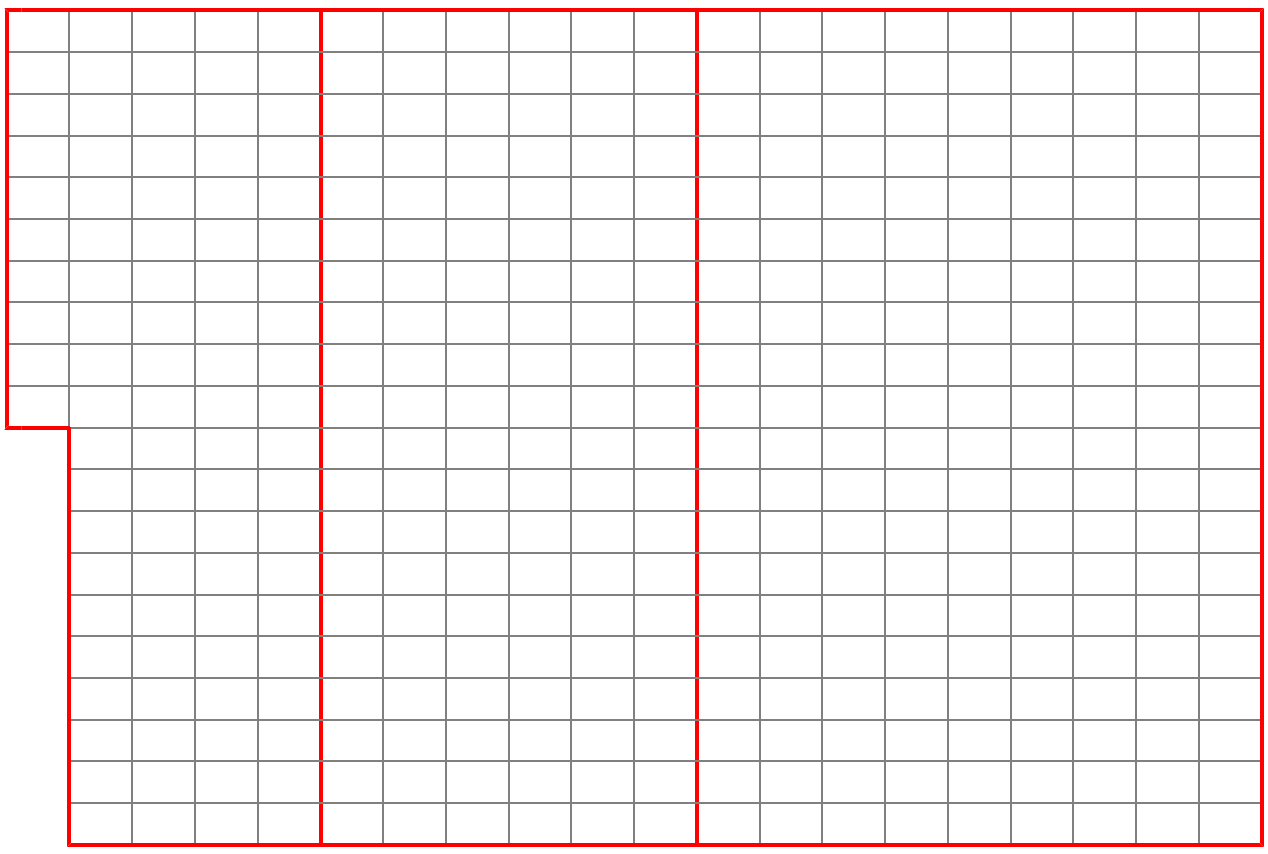
この流れを単純に縮める。

「不純で曖昧な混ざり物として叩き出された感情的要素が息づく場所、信頼や正直が意味をもつ場所、それが「社会」。」

ここでもう一つ**☆対比に気づく**べし。同じ段落に、「理念や教義の厳格な受容者」、「精緻な教義が現実化」、「体制の理念が精錬され、教義が整備されていく」、といった語句がある。先の場所の対立物が、「理念や教義に支配された場所」(感情の死んだ場所)ということになる。この対比を書き込む。

〔解答例〕「理念や教義に支配された場所ではなく、むしろ、理念や教義が不純で曖昧な混ざり物として排除した、感情的要素によって異質な人々が結びつき、信頼や正直が意味をもつようになる場所。」(八五字)

■論述への挑戦

問。あなたの考える「友情」について、論じなさい。八百字以内。

■読解問題用マス目